



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

Title	岐阜県内の私立幼稚園における満3歳児保育の現状と課題： 満3歳児保育のカリキュラム開発を目指して
Author(s)	今村, 光章; 森口, 優歩
Citation	[岐阜大学カリキュラム開発研究] vol.[36] no.[1] p.[58]-[67]
Issue Date	2020-02
Rights	
Version	岐阜大学 / いづみ第2幼稚園
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/79458

この資料の著作権は、各資料の著者・学協会・出版社等に帰属します。

岐阜県内の私立幼稚園における満3歳児保育の現状と課題

—満3歳児保育のカリキュラム開発を目指して—

今村 光章^{*1}・森口 優歩^{*2}

本論文では、岐阜県内の私立幼稚園における満3歳児保育の現状を把握するため、対象となる私立幼稚園98園に、満3歳児保育に関するアンケートを郵送で配布し回収した。52園から回答を得られた。回収率は53.1%であった。結果、岐阜県内の私立幼稚園では2019年現在、満3歳児就園を実施している園が81%（42園）あり、実施していない園が19%（10園）あること、および、満3歳児を受け入れる時期は、「ばらばらである」が78%（32園）、「ある月に一度に受け入れている」が5%（2園）であることなどが明らかになった。また、自由記述部分の考察を通して、満3歳児保育においては、①独立クラスと混合クラスの併用が望ましいこと、②満3歳児の慣らし保育の期間や手法が必要であること、③満3歳児の育ちを保障する保育を根本から考え直さなければならないことが明らかになった。

〈キーワード〉 満3歳児, 私立幼稚園, カリキュラム, 子育て支援

1. 問題の所在

本論文の目的は、岐阜県内の私立幼稚園における満3歳児保育の現状を質問紙調査によって明らかにし、今後の満3歳児保育のカリキュラムの開発の布石にすることである。

周知のように、これまで、小学校や中学校の義務教育と同様に、幼稚園入園は満3歳の誕生日を過ぎて初めて迎える4月1日以降の入園が一般的であった。だが、2019年現在では、年度の途中で3歳の誕生日を迎えた園児がその日以降に幼稚園に入園することができる。満3歳保育とは、このように満3歳の誕生日以降に年度途中で入園した幼児が、年度末まで、つまり3歳児（年少児：以下、本論文では従来の年少児を3歳児と表記し、満3歳児と区別する。ただし、自由記述回答の記載においては原文のままとしその限りではない。したがって、自由記述部分の年少児とは3歳児を指すものと把握する。）として4月を迎えるまでの間の保育を指す。本論文では満3歳児保育を以上のように把握する。

この満3歳児保育の歴史は長くはない。1999(平成11)年ごろから、育児に深い悩みを抱える保護者や早期の職

場復帰を望む母親の要望、少しでも早い時期に子どもを入園させたいと希望する保護者らの存在、そして何より少子化が進行するなかでの少子化対策の一環として進められてきた。それに拍車をかけたのは、保育所や他の幼稚園との競争のなかで、少しでも早く園児を確保しようとする一部の幼稚園であったにちがいない。こうした状況が相互に複雑に絡み合い、満3歳児保育が徐々に推進されるようになった。

行政もこの潮流を後押しした。従来は、満3歳になった幼児が翌年の4月を待たずに年度の途中から幼稚園に入園した場合には、補助金等の対象とはなっていなかった。だが、当時の文部省が、1999(平成11)年に当時の大蔵省に提出した2000(平成12)年度の概算要求の中で、満3歳児になった段階で幼稚園に随時入園が認められることを公にし、満3歳児入園児に対しても、幼稚園就園奨励費及び私学助成費の対象とするとともに、次年度の2001(平成13)年度においても引き続き、調査研究をすとした。同年2月に開催された「幼児教育の振興に関する調査研究協力者会合」では、「幼児教育の充実に向けて：幼児教育振興プログラム(仮称)の策定に向けて(報告)」が提出され、「平成13年度から、希望する満

*1 岐阜大学

*2 いづみ第2幼稚園

三歳児の入園機会を十分確保する観点に立って、幼稚園就園奨励費補助や私学助成の充実を図るとともに、満3歳児入園に関する実践研究の実施と成果の提供を図るとされた。

以上のように、保護者支援と少子化対策の一環としてばかりではなく幼稚園運営の弾力化としても、満3歳児保育が必要であり、幅広く受け入れられてきた。しかしながら、満3歳児保育についての研究はごくわずかである。歴史が短く園児数も限られることから、厚みのある本格的な調査研究は見当たらない。それでも、以下のように3つの先行研究がある。それらについて手短かに概観して、本研究の意義について確認しておこう。

まず、牧正興（2007）の「幼稚園満3歳入園における保育内容(人間関係)の課題と展望：満3歳入園調査研究委託の実践を通して」論文においては、満3歳児入園が、積極的な意味においては、育児負担の軽減や、少子化による人間関係の希薄さをより早期に埋め合わせる場を提供すると肯定的にとらえている。反面、初めての集団生活を体験する3歳児も園生活になじむことが難しいことから、3歳児クラスへの年度途中での入園には、多くの問題が生じると予測している。そして、牧の調査結果では、幼稚園教諭の若干の混乱は避けられないものの、満3歳の園生活には否定的な要因が見出せなかったとしている。むしろ、要因としては肯定的な側面が検出できたと主張する。2007年の時点では、牧は満3歳児保育を肯定的に捉えているといえるだろう。

次に、2009年に出された Benesse 次世代育成研究所『第1回幼児教育・保育についての基本調査報告書』の内容を見てみよう。この調査では、2008年の学校基本調査の結果をもとに、満3歳児を受け入れている私立幼稚園が33.6%にのぼることを明らかにしている。他方、国公立幼稚園で受け入れている園は5.7%にすぎない。

また、満3歳児を受け入れていない園を対象に、満3歳児の今後の受け入れ予定を国公立幼稚園と私立幼稚園に独自に問い合わせたところ、国公立幼稚園では、「受け入れる予定である」がわずかに、1.6%、「受け入れる予定はない」が77.4%、「検討中である」が4.6%であった。他方、私立では、「受け入れる予定である」が5.7%、「受け入れる予定はない」が65.7%、「検討中である」が19.9%であった。国公立幼稚園ではほとんど受け入れる予定は

ないが、私立幼稚園では、少しは前向きに受け入れる傾向があり、若干の温度差が出ているといえるだろう。

2012年に出された同研究所の第2回報告書では、同様に、国公立では89.7%が満3歳児を受け入れておらず、前回調査から微増しているとはいえ、受け入れている園はわずか6.4%であった。私立幼稚園では大幅に増加し、63.4%の園が受け入れており、今後6.4%が受け入れる予定であると回答している。この一連の報告書を見るかぎり、2008年から2012年時点では、概ね私立幼稚園の3園に1園が満3歳児を受け入れていることがわかる。他方、国公立幼稚園は積極的ではないことも明らかである。

3つ目の先行研究として、田澤里喜（2011）の「幼稚園における満3歳児就園の現状と課題：都道府県の実施状況を中心として」がある。この田澤論文では、満3歳児就園が行われるようになった時代的背景を明らかにするとともに、2011年時点の実施状況を都道府県別に考察・検討している。田澤は、「全園児に対する満3歳児の割合が多い県は、宮崎県（10.01%）、鳥取県（9.70%）、石川県（9.52%）、福井県（9.46%）、佐賀県（8.97%）であり、一方、少ない県は、徳島県（0.29%）、滋賀県（0.33%）、神奈川県（0.41%）、奈良県（0.67%）、埼玉県（0.85%）である（27頁）」ことを明らかにしている。田澤の調査は満3歳児の割合であり、ベネッセの園ごとの受け入れの数とは異なるが、満3歳児保育が多い県では全園児の10%にもものぼることがわかる。また、都道府県別に満3歳児保育の実施状況にかなりの懸隔があることも理解できる。

こうした先行研究を手掛かりにして、現在の全国の満3歳児保育の状況を概観してみよう。

2018（平成30）年度学校基本調査によれば、全国での在園児数は1,145,574人であり、5歳児が413,493人、4歳児が389,868人、3歳児が342,213人で、うち前年度間入園とされる48,811人が満3歳児である。つまり、全園児の4.26%にすぎない。

また、国公立幼稚園と私立幼稚園では満3歳児の受け入れの姿勢に大きな偏りがあることも学校基本調査で分かる。満3歳児のうち、国公立幼稚園には200人しか在籍しておらず、残りの48,611人（99.59%）は私立幼稚園の在園者である。つまり、ほとんどの満3歳児が私立幼稚園に在籍しているのである。このように、満3歳児

保育が私立幼稚園を中心に実施されていることが分かる。

ところで、私立幼稚園の園数は 6,538 園である。単純計算すれば、1 園あたり 7.4 人の満 3 歳児を受け入れていることになる。

次に、岐阜県に限って見てみよう。

岐阜県の在園児数は 19,792 人で、そのうち、1,449 人が満 3 歳児である。割合にすると 7.32%で、全国平均よりも高い。また、岐阜県の公立の幼稚園は 69 園あるが、満 3 歳児はわずか 3 人が在籍しているにすぎない。

他方、岐阜県の私立幼稚園は 98 園であることから、1 園あたり 14.8 人が在籍していることになる。全国平均の 7.4 人に比べて、約 2 倍の満 3 歳児が在園しているといえる。このように、岐阜県においても、満 3 歳児入園は私立幼稚園に限られていることがわかる。

上述したように、満 3 歳児保育については研究が進んでいない。しかも、専ら私立幼稚園において満 3 歳児保育が実施されている。加えて岐阜県の調査も皆無である。以上の実情を踏まえて、本論文では冒頭に示したように、岐阜県下の私立幼稚園における満 3 歳児保育の現状を明らかにし、今後の満 3 歳児保育のカリキュラムの開発の手がかりとしたい。

2. 研究の方法

岐阜県内の私立幼稚園 98 園（2019 年 4 月に一般社団法人岐阜県私立幼稚園連合会に加盟している私立幼稚園）に、満 3 歳児保育に関するアンケートを 2019 年 8 月 23 日に郵送で配布し、9 月 3 日までに郵送で回収した。各園に 1 通の質問紙を配布し、園長・主任ほか代表者に回答をしていただくように依頼した。

その結果、52 園から回答を得られた。回収率は 53. 1%であった。質的調査を中心とするため、自由記述項目を多く設けた。質問用紙は紙数の都合で掲載しないが、以下の「3. 調査結果」に示す内容と同一である。

3. 調査結果

3-1 満 3 歳児保育の実施状況

まず、「(1) 2019 年現在、満 3 歳児就園を実施していますか」との問いに対しては、実施している園が 81% (42

園) で、実施していない園が 19% (10 園) であった。

3-2 満 3 歳児を受け入れる理由

以下では、(1) で「実施している」と回答された園のみ (N=42) を対象に、「(2) 満 3 歳児を受け入れる主たる目的や理由を 2 つ教えてください」との問いに自由記述で回答していただいた。その結果、以下のような記述が得られた。

まず、「保護者・地域のニーズ (社会的ニーズ) に応えるため」という記述が 19 件にのぼった。単に、「保護者の要望」 (同一記述 4 件) や「ニーズに応える」という回答、「保護者の希望」「保護者からの要望」「保護者ニーズへの対応」「保護者ニーズが多い (10 月からの無償化に伴い、問い合わせが多くなっていった)」「保護者の要望が強い (とくに今年は無償化に伴い激増)」などの回答があり、10 件にのぼる。

また、「社会的ニーズ (希望される保護者が多い)」「働く母親が多くなって社会が必要としている」「社会のニーズに応えるため」という社会的ニーズとする回答も 3 件ある。そのほかに、「地域・保護者からのニーズがあるため」「地域や保護者のニーズに応える」という地域というキーワードもみられた。

入園時期を早めたいという要望に応えるためという回答もあった。たとえば、「母親の仕事の都合上、早く園に入りたい要望にそうため」「上の子と一緒に幼稚園に通わせたいという保護者の要望にそうため (4 月まで下の子を待つと上の子が卒園してしまうケース)」「事前に入園生活に慣れさせたいという保護者からの要望に応えるため」という回答があった。

次に、就労支援とする回答が 10 件あった。「親の就労」 (同一記述 2 件) のほかに、表現は異なるが、「就労する母親が増えている」「保護者の就労」「保護者の就労支援」「母親の職場復帰への早期の対応」という 6 件の答えがある。ほかに、「働くお母さんの需要が高まってきているため」「働く母親 (共働き) の就労開始 (再就職) 年齢が早まり保育の需要が高まったため」「保護者 (とくに母親) の職場復帰に伴う保育の必要性」「育児休暇をあげて仕事に戻る母親を支援するため」といった回答が寄せられている。

さらに、子育て支援の観点で 9 件あった。「子育て支

援(同一記述5件)」「子育て支援の一環」「働く保護者のための子育て支援」「母親の育児不安への早期の対応」「母親の育児不安を持っている人、また子育てに対する考えがとて偏っている人が多い」という回答がある。

最後に、幼稚園での園児数確保の観点があるという回答が9件見られた。「園児数確保(同一記述4件)」「園児獲得」「園としては園児確保となる(満3歳から入園してもらえると3.4.5歳児へとつながる)」「早期の園児獲得のため(少子化に対応するため満3歳児クラスをつかった)」「子どもの数が減りつつある現在、園児確保につなげていくため」「園児の安定的な確保」という記載もある。

満3歳児の成長発達を促すという観点から、肯定的積極的に受け入れをしたいという理由を挙げる回答もある。つまり、はやく園生活に慣れ、3歳児入園へスムーズに入っていけるようにという回答が7件あった。表現は異なるものの以下の通り、「年少児から入園するにあたり園生活に慣れる」「年少へのスムーズな接続のため」「3歳児入園をスムーズに迎えられる様、集団生活に少しずつ慣れることができることを目的として」「3歳児入園へスムーズに入っていけるように(子ども自身が早く慣れるので)」「早い段階での生活リズムの獲得やスムーズに集団生活に入れる」「満3歳児を受け入れることによって、年少への園生活がスムーズにできるため」「入園予定児が早く園生活に慣れるため」といった記述がみられた。

その他の回答は以下の通り15件ある。

「保護者への園の方針等の理解を深めるため」「本園の保育に親しみ、関心を持ってもらうため」「満3クラスの有無で幼稚園選びをする保護者もいるから」というあからさまではないが婉曲的な園児募集の観点がある。これらは直接的ではないので、園児数確保にはカウントしていない。

また、「家庭の事情」「家庭の事情を配慮(就労、出産など)」「保護者支援」「家庭の都合により受け入れている」「母親の環境として下の子どもがいたり、仕事に復帰される関係で預け先を探される傾向が強いため」といった意見もある。これも子育て支援の範疇に入るとはいえ、はっきりとした記述がないので、その他に含めた。

さらに、「早期教育」「幼児の早期教育」「幼稚園就園前のプレになること」という早期教育という捉え方もあった。「待機児童の対策として」「時代の流れ」「少子化

による兄弟姉妹や地域の子どもの関わりとの減少への対応」「子どもにとって園生活を経験することが大変良いと感じるため」「家庭の教育力の低下への協力となるから」「満3歳の子どもたちが家庭的な雰囲気の中で初めての集団生活のあり方を、ゆったりとした温かさの中で感じ学んでいけるため」「縦割り保育の中で、満3歳の子どもはとて可愛がられ、今まで年少児で一番小さかった子が少し大きくなった気分で優しく接してくれるため」といった記述がみられた。これらも重要だがややあいまいで主観的な表現であったりするため、その他の範疇に分類した。

3-3 慣らし保育について

「(3) 満3歳児の入園前に、慣らし保育のような活動や取り組み等は行っていますか」という問いに対しては、57%(24園)が行っていると答えた。43%(18園)は行っていないかった。

3-4 具体的な慣らし保育の内容について

「慣らし保育を実施している」と回答した園については、「(4) 具体的にどのような活動や取り組み等を行っていますか」と問いかけたところ、以下のような回答があった。

もっとも記載例が多かったのは、親子教室である。

「週1回母子での通園(1時間程度)を希望者に登録してもらい(入園の有無は問わない)、親子8組~10組単位くらいでクラスを作り、遊び、生活中心の活動を行い、園の環境に馴染んでもらい、「この園で納得!」と思った人が満3歳や年少に申し込んでくる。保護者同士のつながりもできる」という記述や「1月に2回親子で1時間一緒に制作を通して道具の使い方を練習したり、基本的な生活習慣に慣れさせている」「月2回の未就園児教室を行っている。模擬保育をする中で制作活動をしたり、リトミックをしたり、季節に合わせた活動をしている」などの回答がみられる。

詳しい説明を付した回答のほかに、「親子クラスで週1回の活動を行っている」「親子教室を行い、園に慣れてもらっている」「親子教室を定期的に行っている」「定期的に親子教室を開き、先生と触れ合う機会を作っている」といった記述があった。

また、親子教室という意図も多分に含まれているが、イベントをしているという意識での記述が散見される。

たとえば、「ファミリープラザ事業を通して週 3 日の託児を行っている」「未就学児対象で「2.3 才児対象、ちびっこ広場」を年 11 回開催（土曜日、行事含む）している」「子育て支援、ワイワイ広場に親子で遊びに来てもらう（年間 23 回）」「誰でも参加できる月 1 回の未就園児教室」「親子で遊びに来る機会を作っている（自由に遊ぶ、トイレに行く、おやつを食べる等）」などである。

上記以外に、「未就園の子を対象に午前中までの時間で親子共に活動を行っている（制作やリトミック等）」「プレ保育（親子）と短時間保育」「3 歳児の保育を一緒に行ったり、朝の会、排泄など基本的な生活習慣を覚えていく」「入園前のおためし保育として、希望者のみ半日程度園児と一緒に過ごす」といった、園内の生活に満 3 歳児を取り込むという方法があることが分かった。

以上のように、具体的な慣らし保育の内容として、親子教室、イベント、体験入園があることがわかった。

3-5 満 3 歳児の受け入れ時期について

「(5) 満 3 歳児を受け入れる時期について、次のどちらに当てはまりますか。」については、受け入れる時期がばらばらであるが 78% (32 園)、ある月に一度に受け入れられているが 5% (2 園) であった。

3-6 満 3 歳児の受け入れ時期

「(6) 満 3 歳児の学級編成について教えてください」との問いには、独立クラスが 59%、混合クラスが 24%、その他が 5%、無回答が 12%という回答が得られた。

3-7 学級編成のメリットとデメリット

「(7) 前問の(6)で回答した学級編成のメリットとデメリットについて教えてください」との問いには以下の回答があった。満 3 歳児だけのクラス（独立クラス）の<メリット>とデメリット、3 歳児クラス（混合クラス）に入れる場合の<メリット>とデメリットという 4 つの観点から回答を整理しておこう

3-7-1 満 3 歳児だけのクラス(独立クラス)の<メリット>

「同じような発達段階の子どもたち同士で興味を持つことなど、偏りなく活動等へいかしていける」「同じ年齢

の子と一緒に活動ができる」「同じ年齢での遊びが楽しめる」「年齢に合わせた保育活動ができる」「年齢に合った保育ができること」「歳が一緒なので同じ学年として仲良く、安心できる友達となり、園生活を安定して過ごせる」

「それほど差がでないこと、同じレベルで活動が進められる」など、同じ発達段階であることを重要視する記述 10 件あった。

次に、「満 3 歳児の発達に合わせたカリキュラムの下、園生活が経験できる」「満 3 歳児に応じた保育内容や生活リズムを行うことができる」「満 3 歳児のカリキュラムで 1 年間保育ができる」「学年による配慮を必要としないため、学年に沿ったカリキュラムを立てられる」など、満 3 歳児を意識して、3 歳児とはことなったカリキュラムがたてられることをメリットとして受け止める意見も 5 件あった。同じ発達段階という点ではなく、満 3 歳児の発達を踏まえるという観点である。

さらに、「30 人～35 人で担任が 3～4 人入るため、手厚くみることができる」「先生も指導が進めやすい」という記述がみられた。

3-7-2 満 3 歳児だけのクラス(独立クラス)の<デメリット>

入園時期がばらばらであるというデメリットがある。たとえば、「月に何名か入園するため、すでに入園している子への対応と新しく入園してくる子への対応に配慮が必要」「月ごとの入園となるので、月初めは不安で泣く子がいるので全体に少し落ち着かない」「入園時期がばらばらなので個別の対応が大変である」「毎月入園する子がいるため、一斉での保育が進めにくい」「年中随時受付となることで、クラスが落ち着くことがない」などである。

また、「見て覚える（身につける）ことは少ない（活動に時間がかかる）」「1 年の年齢の差でできること、できないことの差が大きい」「4 月入園の子どもが物足りなく感じる場合もある」「園生活の流れなど見て覚える、身につけるといことが薄い」「年少で 20 人 1 人担任となったとき、子どもが順応するのに時間がかかる」といった記述もみられた。自分より成長発達の早い年長の子もたちを見る機会がないので、刺激が薄いということである。

3-7-3 3 歳児クラス(混合クラス)に入れる場合の<メリット>

何よりも 3 歳児が育つということをメリットに挙げることが多い。

たとえば、「在園児がお世話をしてあげることで年上で

あるという自覚が芽生え、よりよい園生活が送れる」「3歳児が満3歳児に対してお世話をしてあげる等、縦のつながりができる」「3歳児が育つ（思いやり、お世話、自覚等）」「3歳児も小さな満3歳児がいることで、しっかりしなくてはと張り切り意欲が増す」などである。踏み込んだ表現では、「在園している園児の意識・能力の向上に効果がある」「3歳児は満3歳児に対して優しく接し、お互い良い環境である」「周りの子が満3歳の子の世話をすることで協調性や思いやりの気持ちももてる」といった回答もみられた。

また、満3歳児側からみた見方もある。「モデルがいて満3歳児としては動きやすい」「3歳児の姿を見ながら真似て覚えていくので慣れやすい」「お手本が大勢いるので見て覚えることができるため、成長が早い」という回答がある。

さらに、満3歳児が4月に3歳児（年少児）として入園する場合のメリットもあるという回答があった。「次年度3歳児クラスになった時にスムーズに生活ができる」というものである。

3-7-4 3歳児クラス(混合クラス)に入れる場合の<デメリット>

保育者の負担増が懸念される回答がある。「1年の年齢の差を感じる時と、担任の負担が増えること」「全体活動の際、満3に手がかかる」というデメリットが書かれていた。

加えて、満3歳児の立場からみるとメリットと捉えられても、3歳児の側から見るとデメリットとなることもある。たとえば、「3歳児の活動が阻害される場合がある」「満3にとって少し（活動の）レベルが高くなってしまいう事もある」とあり、結局、「周りの子との差が大きいので活動等まとめることが難しい」ということになる。

ひいては、クラス運営もやや困難になるようだ。「クラスの雰囲気が変わり、まとまりがなくなったりする」「月ごとに新入園児が入るので落ち着かない」という意見がある。

さらに、「子どもに年少児が対象に保育をするのでできないことが多い。そのため、園児、保育者双方に負担が大きい」「発達が1年遅いことで理解力、運動能力、基本的な生活習慣の面での差があり、十分に添った保育が難しいときがある」という記述があった。

3-8 1クラスの人数について

「(8) 1クラスに受け入れる満3歳児の人数は何人ですか。」という問いには以下の図1のような回答が得られた。

1～5名という園が17%、10人以内を合わせると22%であるが、11人から20人は45%にも及ぶ、21名以上が17%である。岐阜県の私立幼稚園で平均14.8人を裏付ける結果であると言える。

図1 クラスあたりの満3歳児の人数

1クラスに受け入れる満3歳児の人数	園数	割合
1～5人	7園	17%
6～10人	2園	5%
11～15人	8園	19%
16～20人	11園	26%
21人以上	7園	17%
その他	1園	2%
無回答	6園	14%

N=42

3-9 1クラスあたりの保育者の人数について

「(9) 満3歳児を担当している1クラスあたりの保育者の人数は何人ですか。（正規職員・非常勤職員を問いません。）」という問いに対しては、一人が14%、2人が43%、3人が5%、4人以上が2パーセント、その他が19%、無回答が17%であった。

3-10 満3歳児の今後の受け入れ予定について

(9)の問いで「満3歳児保育を実施していない」と回答した園に対して、「(10) 今後、満3歳児を受け入れる予定はありますか。また、2019年現在、満3歳児就園を実施していない理由を教えてください」という問いに回答していただいた。結果、今後、5園が受け入れる予定で、5園が受け入れ予定がないと答えた。

2019年現在、満3歳児就園を実施していない理由は保育士不足と職員不足による。「保育室がなかったから」「空き教室もなく、増築の予定もないため」「運用可能な教室がないため」といった保育室不足を理由に挙げる園

がある。また、「職員が足りないことと、園舎の改修工事を予定しているため、空き教室が必要と思えたため」「幼保連携のこども園として0歳からの保育も行っているため、部屋数や保育士確保の困難もあり、実施するまでに至っていない」といったように、職員不足を理由に挙げることもある。

さらに、「その年度の年少組に満3歳児の園児を加えて一緒に保育するため、年少組が定員20名に満ちている場合、受け入れができない事がある」「数年前は満3歳児を受け入れていた。十分需要もあったが、園の面積に対し園児数が多いことも県より指導いただいたため、当時20名1クラスの満3を閉鎖した。しかし、2022年にむけ、幼保連携型認定こども園へ移行していく予定である」「9月より実施する（毎年そのように行っている）。1学期は小、中、長の子どもたちの不安感や戸惑いもあるため、まず小、中、長の子どもたちに向き合っていきたい」「定員を上回ってしまうため」「令和2年3月で閉園するため、年長児のみ」といった記述があった。

3-11 結果のまとめ

以上の結果をまとめておこう。

まず、岐阜県内の私立幼稚園では、52園中42園が満3歳児入園を実施していると回答し、約80%の私立幼稚園で現在満3歳児入園が行われている。

次に、満3歳児を受け入れる主な目的や理由についての質問では、自由記述とし複数回答とした。この結果から、42園の実施園で中でも多かった回答が、順に保護者・地域のニーズ（社会的ニーズ）に応えるため（19件）、就労支援（10件）、子育て支援（9件）、園児数確保のため（9件）、園生活に慣れ3歳児入園へスムーズに入っていけるように（7件）であった（その他の回答は除く）。保護者ニーズの中には、事前に入園生活に慣れさせたいという意見や、仕事の都合上早く園に入れたいと希望する母親が多い。

入園前の慣らし保育については、42園中24園(57%)が行っていると回答し、半数以上の私立幼稚園が、満3歳児の入園前に慣らし保育として何らかの活動や取り組みを行っている。その内容として、親子で一緒に活動を行ったり、また一日ではなく短い時間で保育や活動を体験してもらったりしている。

満3歳児の受け入れ時期については、ある月に一度に受け入れていると回答した園が42園中2園(5%)、受け入れる時期はばらばらであると回答した園が42園中33園(78%)となった。約8割の私立幼稚園が満3歳児を月ごとに受け入れていることがわかった。

満3歳児の学級編成については、満3歳児だけのクラス（独立クラス）であると回答した園は42園中25園(59%)、3歳児のクラス（混合クラス）であると回答した園は42園中10園(24%)となり、満3歳児だけのクラスを編成している私立幼稚園が多いことが判明した。その他（2園）では、具体的に保育所という2歳児クラスのように、3歳児以降同学年になる子が入っているクラスや、2歳児・満3歳児クラスに登園するとされた。

それぞれの学級編成のメリットとデメリットとしては、まず独立クラスのメリットで多く挙げられた回答が、同じレベルで活動が進められることや年齢に合わせた保育活動ができることであった。独立クラスのデメリットでは、見て覚えたり身につけたりすることが少なく活動に時間がかかることや、月ごとの入園となるためクラスが落ち着かないことなどが挙げられた。

次に混合クラスのメリットでは、お手本（3歳児）がいるので真似て覚えていくことができ、成長が早く慣れやすいことや、3歳児が満3歳児の世話をすることで思いやりの気持ちや自覚が出てくるなどの回答があった。混合クラスのデメリットでは、担任の負担が大きいことや、満3歳児にとって活動のレベルが高くなってしまい、満3歳児に手がかかってしまうことが多くなることなどが挙げられた。

1クラスに受け入れる満3歳児の人数について、学級編成と関連していることがわかった。学級編成が独立クラスである園は1クラスあたりの満3歳児の人数が多く、混合クラスである園は1クラスに受け入れる満3歳児の人数が少ないことがわかった。そのため、独立クラスである場合、1クラスあたりの満3歳児の人数を16~20人とする園が多く、反対に混合クラスである場合、1~5人満3歳児を受け入れている園が多い。

満3歳児を担当している1クラスあたりの保育者の人数については、約40%の私立幼稚園が保育者2人で満3歳児を担当している。その他については、1~2人や2~3人などその時々によって人数が違う園がある。

現在満3歳児入園を実施していない52園中10園(19%)については、今後満3歳児を受け入れる予定であると回答した園は10園中5園(50%)となり、半数の私立幼稚園が今後は満3歳児入園を行う方向であるとわかった。また、現在満3歳児入園を実施していない理由としては、年少児の数が多く受け入れることができないことや職員の不足、空き教室がないことなどが挙げられた。

4. 考察

岐阜県内の私立幼稚園を概観する限りでは、約8割が満3歳児入園を実施しており、満3歳児保育が定着しつつあると捉えて差し支えないであろう。その一番の背景には、働く母親が増えたことにより社会全体が保育の必要性を感じているということが考えられる。これに伴い、育児休暇終了後に仕事に復帰するために満3歳児入園を希望する母親が増加し、満3歳児入園に対する保護者のニーズも増していったと思われる。このような保護者ニーズを受けて、幼稚園側も育児と仕事を両立させて頑張っている母親を支援しようと就労支援や育児支援を行い、満3歳児入園にもつながったのではないかと考えられる。

次に、学級編成について見てみよう。

独立クラスと混合クラスのそれぞれのメリットとデメリットについてのアンケート結果によると、どちらの学級編成にもメリットとデメリットがあることがわかった。その中で共通して言えることは、満3歳児が月ごとに入園してくる場合、クラスが落ち着かないことや、クラスの雰囲気にとまどまどがないということである。満3歳児にとってはまだ慣れない環境での生活となるため、そこに新しい満3歳児が入ってくることで環境も変わり、気持ちの面で不安定になってしまうのではないと思われる。

混合クラスの場合、満3歳児に加え3歳児もいるため、3歳児と満3歳児で生活習慣や活動など様々な面で差がある中で、保育者はクラスをまとめていかなければならない。当然、保育者の負担は大きくなり、担任1人で全体をまとめるのは簡単なことではないと思われる。とは言え、混合クラスだけが幼児、保育者共に負担が大きいということではない。

アンケート結果にもあるように独立クラスの場合、混合クラスとは違いお手本(3歳児)がいないために、満3

歳児は見て覚える機会が少なく、生活習慣や園生活の流れなど一つ一つ身につけていくことに時間がかかる。当然ながら、保育者が満3歳児に手をかける時間は混合クラスよりも多くなり、月ごとに満3歳児が入ってくるとなると、新入園児の対応とすでに入園している幼児の対応とで忙しくなり、保育者も落ち着くことがないと考えられる。独立クラス、混合クラスのどちらにせよ、少なくとも保育者の負担は大きくなるということである。

この研究結果を踏まえて言えば、満3歳児の学級編成において独立クラスが幼児と保育者双方にとって望ましいのではないかと考える。なぜなら、保育者にとっては満3歳児に合わせたカリキュラムで保育や活動ができ、進度を合わせ一緒に活動を進めることができるからである。ところが、混合クラスだと3歳児と一緒に活動のため、できる範囲に差があり、どうしても満3歳児の活動が軽視されてしまうからである。だが、独立クラスであれば、幼児にとっても同じ年齢の幼児と落ち着いた雰囲気、自分のペースで生活習慣や活動の流れを身につけていくことができるのではないかと。そのため、保育者と幼児双方にとって、落ち着いた雰囲気でも園生活を送ることができると感じられる。

しかし、決して混合クラスが不適切であるということではない。結果で述べたように、どちらの学級編成にせよ、ここで大事なことは保育者が満3歳児入園を負担に思わず、どれだけやりがいを感じて楽しく保育ができるかだと思われる。詳しくは後述するが、この問題を解決するには独立クラスと混合クラスの併用が望ましいと言えるだろう。

次に、満3歳児入園を実施していない園についても言及してみよう。満3歳児入園を実施していない園は52園中10園である。実施していない理由については、アンケート結果によると、定員を上回ってしまうことや空き教室がないこと、職員の不足が多く挙げられていた。定員を上回ってしまうことや空き教室がないことは、仕方のないことかもしれないが、職員の不足については私立幼稚園に限らず、保育全体の課題とも言える。満3歳児入園に限らず、子どもを受け入れたくても受け入れることができない理由、保護者ニーズに応えたくても応えることができない理由は、まさにここにあるのではないと思われる。

社会全体が保育を必要としている一方で、その必要とされている保育の環境が整っていない。だが、空き教室がないことや職員の不足などの課題は、今すぐに解決できることではない。社会全体が保育を必要とするだけでなく、社会全体が保育についての理解を深め、柔軟に対応することができるのではないかとと思われる。たとえば、育児休暇制度について、期間を3年と決めてしまうのではなく、母親と相談して仕事に復帰するタイミングを決めることもできるだろう。また、最近では企業によって作られているところもあるが、会社内に託児スペースを設けるなど、仕事と育児を両立させて働く母親への支援もできるだろう。社会全体で保育環境を整える必要がある。

5. 満3歳児保育のカリキュラム開発に向けて

満3歳児入園児のカリキュラム開発に向けて、本調査から得られる示唆はなにか。以下では4つの観点から今後の手掛かりを垣間見てみよう。

5-1 独立クラス・混合クラスの併用

第一に、本調査ではクラス編成にばらつきがあり、それぞれにメリットとデメリットがあることが明らかになった。

先のベネッセ次世代育成研究所の調査報告では、全国では混合クラス、独立クラスの実施割合が、独立クラスが約30%、混合クラスが約63%とされていた。本調査では、岐阜県においては、独立クラスが59%、混合クラスが24%という結果であった。では、どちらが満3歳児保育によりふさわしいのだろうか。

どちらがふさわしいのかを考察する際、満3歳児入園を実施していない理由の一つに、空き教室がないことや職員の不足などが挙げられていたことが手掛かりになる。逆に言うと独立した保育室があることが望ましいといえるからである。また、常時、独立クラスのなかだけで満3歳児保育を行うデメリットも前述した通りである。

これらを踏まえると、満3歳児を常時、独自に保育しない場合でも、満3歳児のみを保育できる個別の保育室があれば、独立クラスと混合クラスのデメリットを解消し、メリットを最大限生かすことができる。換言すれば、

保育の内容に応じて、独立クラスにしたり混合クラスにしたりして適宜使い分ければ、デメリットの大部分を解消できるように考えられる。つまり両者の併用が理想的ではないだろうか。

ただし、それには職員数も必要となる。満3歳児の保育者が3歳児保育者とは別に必要となるからである。保育者不足は幼稚園教育全体の課題であり、満3歳児担当の教員を雇用するとなると経営上の問題も生じらるだろう。しかし、満3歳児担当者を3歳児担当者とは別に雇用できれば、理想的であるのは間違いない。すでに述べたように本調査では、3歳児担当の保育者が混合クラスで満3歳児を保育することがかなりの負担になることが明らかになった。このように職員確保の課題をクリアする必要がある。保育施設は子どもたちのための場ではあるが、そこに保育者がいて保育が成立する。このように、保育室と保育者の確保が急務である。

また、受け入れ人数についても過重な負担にならないように配慮する必要がある。受け入れ時期については、母親が育児休業から復帰する時期に合わせる必要もあり、個別で対応せざるを得ない。としても、独立した保育室と満3歳児担当の保育者がいれば、受け入れ人数と時期については大きな問題とはならないだろう。

5-2 満3歳児の慣らし保育の必要性

第二に、満3歳児を受け入れる前段階の慣らし保育の必要性に言及しておこう。考察で述べたように、その必要性は明らかである。3歳児でも慣らし保育期間が存在するが満3歳児においてもその期間と方法が必要である。

親子で園生活を体験することや、保育時間を短くして1～2週間程度受け入れることなど様々な工夫が必要であると考えられる。

5-3 満3歳児保育のカリキュラム開発に向けて

第三に、カリキュラム開発は急務だが一時的部分的なものに過ぎないという見方も示しておこう。働く母親が増えたことにより、社会全体が満3歳児保育の必要性を感じている。現在、岐阜県の私立幼稚園の約8割が満3歳児入園を行っている。このことから、満3歳児保育のカリキュラム開発が急務であると言える。

ただし、私立幼稚園の認定こども園化もすすんでいる。

認定こども園になると満3歳児入園という課題は消滅する。現在の岐阜県における満3歳児入園のカリキュラムの課題は一過性の課題であるともいえるだろう。認定こども園に移行衣替えせず幼稚園のままの体制をとるところでは満3歳児保育が継続する。そうではないところでは、満3歳児保育そのものがなくなる。つまり、カリキュラム開発は急務ではあるが一時的かつ部分的な問題であるのかもしれない。

5-4 満3歳児の育ちを保障する保育が必要

最後になるが、社会的ニーズを重視するあまりに、満3歳児入園を急速に進めすぎると、子どもの育ちの視点が抜け落ちてしまうのではないかという懸念が払拭できない。国公立幼稚園が満3歳児保育に消極的なのはそうした背景があるからではないだろうか。今後、満3歳児入園が子どもにとってどのような教育的効果があるのかを実証的に明らかにしながら、条件整備をして受け入れていく必要がある。ただし、満3歳児や3歳児にとっての相互の利点がないわけではない。集団生活や他児との関わりなど家庭では得られないことが身に付いていくのは確かである。だが、3歳児入園からでも無理なく身に付けていくことを、満3歳児入園の子どもに無理強いする必要はないだろう。

もとより、社会全体が保育を必要とし、満3歳児入園がすすめられているのは現状として受け入れるほかない。しかしながら、カリキュラム開発や編成を急ぐ必要はなく、まずは、だれのための満3歳児保育なのかという根本的な問題を共有する必要がある。

5-5 まとめと今後の課題

以上のように、①満3歳児保育においては、独立クラスと混合クラスの併用が望ましく、そのためには、②満3歳児用の保育室と担当の保育者を確保する必要があり、同時に、③慣らし保育が必要であると言える。また、④満3歳児保育のカリキュラム開発は急務ではあるが一時的かつ部分的なものであり、⑤満3歳児の育ちを保障

しつつ保育を実施しなければならないと考察できる。

今回の調査では、満3歳児の保内容にまで踏み込んだ調査研究は行えず、保育内容については触れられなかったが、稿を改めて、満3歳児保育の内容についても検討したい。

【謝辞】

本研究の調査においては、一般社団法人岐阜県私立幼稚園連合会会長 石井亮一氏、ならびに、同事務局の皆さまにお世話になりました。心よりお礼申し上げます。

また、お忙しいなか、回答していただきました岐阜県の私立幼稚園の先生がたにも、衷心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

引用文献

- ・牧正興（2007）、「幼稚園満3歳入園における保育内容(人間関係)の課題と展望：満3歳入園調査研究委託の実践を通して」, 福岡女学院大学人間関係学部編 (8), 99-105.
- ・Benesse 次世代育成研究所（2009）『第1回幼児教育・保育についての基本調査報告書』
(<https://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=3293>) (最終アクセス日 2019年12月24日)
- ・Benesse 次世代育成研究所（2012）『第2回幼児教育・保育についての基本調査報告書』
(<https://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=4053>) (最終アクセス日 2019年12月24日)
- ・田澤里喜（2011）、「幼稚園における満3歳児就園の現状と課題：都道府県の実施状況を中心として」, 玉川大学教育学部紀要, 『論叢』2011, 19-35.

参考文献

- ・保育と仲間作り研究会編（2002）, 『満3歳児就園』, 小学館.
- ・無藤隆・今井和子編（2007）, 『幼稚園の2歳児の保育と子育て支援』, 小学館.